
自殺志願者の君へ。

yayu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自殺志願者の君へ。

【Nコード】

N3382D

【作者名】

y a y u

【あらすじ】

修正中です。2月11日までは全ての修正を終える予定ですのでしばしお待ちください。

それは屋上で

秋晴れというには既に遅く、冬晴れというにはやや早いであろう――染み一つない空が朔の頭上を支配していた。

いかんせん、今はそんな景色を

「ああいい天気だなあ」

なんて眺めている暇は無かった。

朔の目は、立ち入り禁止という紙――半分破れて読みにくくなっている――が貼られている屋上の開き戸を開けた時から一点に釘付けになっていた。

そして――

「死んじゃ駄目ーっ!!」 人気の無い屋上でフェンスを飛び越えようとする少女に叫びながら、突進するように走り、腕にしがみ付く。

その少女は朔の突然の出現に少し目を見開くものの、振り払おうと必死に腕を動かす。しかしその抵抗も虚しく、バランスを崩した肢体は朔を巻き込みながらそのままコンクリートの床に、落ちた。

「いっつう……」

朔は打ち付けた背中の中の痛みに無意識的に涙腺が緩むのが分かった。朔を下敷きにした張本人はむくりと上半身を起こす。ふわりと、シトラスの香りが朔の鼻腔をくすぐった。

「――人が死のうとしている時に邪魔しないでくれない」

向き合った目の前の人物は、無表情で朔にそう言い放った。至極抑

揚のない声で。

「……へ？」

空いた口が塞がらない、とはきっとこの事を指すのだろう。それほどまでに朔は一驚を喫していた。

「だから邪魔するなど言っているんだ」

朔が言葉を呑み込めていないと思ったのか、リピートする。その双眸に迷いはなかった。

朔としては、いくら自殺をしようとしている所に止めに入ろうとも、少しは謝意があってもいいのでは、と心の底では期待していたのだが、その期待を見事に裏切られた気分だった。そう、見事に反したのだ。

その時タイミングが良いのか悪いのか、チャイムが鳴った。いわゆる、予鈴というもの。

それを合図に少女は立ち上がって朔から退いた。

朔はしばし茫然としていて、体への負担が軽くなったことにも気付いていないようだった。

少女が数歩歩んだ所で朔は我に返る。

「あ、あの……」

黒い、艶のある長い髪が背中揺れ、切れ長の瞳が朔を捉える。

正確には朔の目を。

先を促すかのような視線に朔は慌てて続けた。

「あたしの名前は、望月朔っていうんだ、よろしく」そう言って持ち前の明るさでなんとか笑顔を作ってみせた。

「……あまりゆっくりしていると、次の授業に遅れるんじゃない？サボるのは良くないし」少女はそれだけ言うと、髪をなびかせながら屋内へと戻っていった。

朔はその後ろ姿をボーッと見つめているばかりだった。例え、その姿がドアの向こう側に消えても。

そして後々朔は、あるひとつの重要なことに気付いた。

「——名前、聞いてなかった」

それは屋上で＊end

唯々諾々。

「へー。それでその少女の言葉通りサボらないで帰ってきたんだ」
時は昼休み。

朔の向かい側に座る少女が購買部で買ったイチゴオレのパックにストローを刺しながらそう言った。

一見、金髪でピアスを付け、眉毛も薄く、吊り上がっている茜に――この場合ヤンキーという言葉が一番しっくりくる――イチゴオレという組み合わせはギャップがありすぎて、朔は思わず破顔しそうになる。朔達は先程の3，4時間目の合間にあったことについて話していた。

「数Aの授業が嫌だからってサボるってあんなに高らかに宣言してたのね」

祐希は上品に笑った。眼鏡の奥で大きな瞳が弧を描く。祐希は笑う度に笑い皺ができてとても可愛い。

朔も今度こそ笑顔になった。

祐希は黒い髪を二つに括り、銀縁眼鏡にスカートもきっちりひざ下だ。そのため、第一印象は『真面目』な雰囲気があるが――実際頭は良い――、校則を守っているだけで、朔の癒しの存在となっていた。

「つつきーの初サボりは失敗に終わったってことで。めでたしめでたし」

茜が些か棒読みで茶化す。ストローを口にくわえ、下品な音を立てながら一気に吸いあげた。

「次こそ成功させるもんっ！」

ぷくつとわざとらしく頬を膨らませる朔に、そんなことしても可愛くないよ、と茜は笑った。

物事をストレートに言う茜を嫌いでは無かったが、同時に苦手でもあった。

それでも茜と一緒にいるのは、それ以外に“居場所”がないからだ。

「っていうかさー」

茜がストローから口を離す。どうやら飲み終わったようだ。パツクをくしゃり、と握り潰した。

「――自殺とか、あり得なくね？」

ぴくりと、一瞬だけ朔の肩が動いた。

「茜、ハッキリ言い過ぎだから」

そう言いながらも含み笑いする祐希。

朔は黙って爪先を見つめた。

「死ぬんなら勝手に死ねばいいのに。――学校で死ぬとかどんだけ見てもraithたいんだよ」

擦れたような高い声。――茜の笑い声だ。

これを聞く度に朔は自分が笑われているような感覚に陥った。

茜の煩い笑い声は周囲にも聞こえていて、何事かと自分の手を休めてこちらを窺う目がたくさんあった。

「朔もそう思わない？」

突然話題を振られ、反射的に顔を上げる。

茜の目は有無を言わせないような強い光を宿っていた。

そんな瞳に見つめられて思わず朔は目を逸らす。

「……うん」

全く思ってもいない事を口にする。

だよねえ

茜は上機嫌に鼻歌を歌いながら手に持っていた残骸をゴミ箱にシュートした。

それは外れてゴミ箱の角に当たり、壁との隙間に落ちてしまった。

唯々諾々。＊e n d

決意。

放課後、朔は部活もそこそこに、同じ部活である坂井菜穂さかいなほと共に帰路に着いた。

「この前の土曜日、うちのジジイがまたバイク買ってきたからさ、一発蹴りを入れてやったよ。――『家計を考えろこのすつとこどっこい!』ってね」

そう言って豪快にがはは、と男らしい笑い声を上げる菜穂。多少なりとも言葉遣いは良くは無かったが――選んだ言葉も古くさい――、そのサバサバとした言動に、朔は心の底で密かに憧れを抱いていた。

しかし、今朔の心中にあるのは『昼前の出来事』。

よって菜穂の言葉は右から左へ受け流し、相槌も適当だった。それに気付いたのか、菜穂は声のトーンを落とした。

「――何かあったのか?」

朔はハツとし、菜穂の顔を窺う。

心配そうな顔つきでこちらを見ていた。

「何でもないよ。――ただ、疲れちゃっただけで」

朔は自然な笑顔になるよう気を配りながら作り笑いをした。

「何かあったのかは分からないけど、言いたくなったらちゃんと言いなよ」

菜穂は余計な詮索をしない。それをとある人は『他人に干渉しない冷たい人』と言ったが、今の朔にはその心遣いがあった。

朔はお礼を言うと、菜穂と別れて信号を渡った。

いづらか歩き、家に着いた。この辺りは住宅街で、朔の家もその中のひとつ。2LDKの一戸建てだ。

「ただいまー」

朔が気のない声を玄関で響かせる。

スウェットに着替え、リビングのソファーに――正確には弟・綾斗あやとの隣に――どっかりと遠慮なく座った。

何をするんだ、という嫌悪の目で見てくる綾斗を無視してリモコンを奪い取り、ニュース番組に変える。

綾斗は悲鳴声を上げる。まだ中2で声変わりしてないせいかな、かなり甲高い。

「何するんだよ姉ちゃんっ！　せっかく大好きなアニメ見てたのに」
ぶつぶつ文句を言い続けるが、それは食い入るように画面を見つめている朔の耳には届かない。

綾斗は名前に似合って女顔だ。本人もそれを気にしているが、中身も少々子供らしいために、年齢より幼く見える。

『次のニュースです』

アナウンサーが画面を見ながら原稿を読む。

「アニメ見たいよ姉ちゃんってば！」

「黙って」

朔が冷たい口調で弟を制す。学校では見ることがない、素の朔だ。

綾斗はそのただならぬ威圧感に押し黙る。

『――T県〇×市のマンションで、少女が飛び降り自殺をしたという110番通報がありました』

飛び降り自殺。

朔の心臓が跳ね上がる。

「あら、また自殺？　最近は何騒ねえ」

テーブルに食事を並べる母が、リビングのテレビを見ながら言った。

『自殺したとみられるのは、〇×高校に通う佐藤かなえさん、16歳です』

「まだ若いじゃないの。可哀想に。いじめとかあったのかしら」
母はそう言いつつも、最後に夕飯よ、と二人を促した。

夕飯も食べ終え、風呂に入り、寝る準備をしてから自分の部屋に戻る。

朔の好きな歌手のポスターが白い壁を陣取っていた。特に女の子らしい部屋でも無く、ポスター以外は割りと殺風景な部屋だった。

薄い水色を基調としたベッドにダイブする。この微妙な浮遊感が朔は好きだった。

ケータイを弄りながら今日の出来事を振り返る。

脳裏に焼き付くのは、あの少女の意志の強そうな瞳孔。

朔はある一点の考えに辿り着くとしばらく迷うように眉をひそめたが、やがて決心したのか、電気を消して布団を深く被った。

夜は耽^{ふけ}る。

誰かの想いと共に。

決意。
*
e
n
d

決意。(後書き)

ニュース番組最近見ないのでこういう書き方で良かったのか迷いました（――；）

再会…前編

「おはよー」

教室のドアを勢いよく開けながらいつもと同じように挨拶をする。皆は朔の姿を確認すると、個々に返事を返した。

それに安心しつつ、自分の机にエナメルバッグを無造作に置く。窓際の後ろから二番目の席。あまり先生に当てられる事もなく、眠っていても注意される事は殆んど無いため、朔のお気に入りだった。

朔が腰を下ろすのと同時に茜が朔の机へとやってくる。

「おはよ」

朔は自分の怪訝そうな顔を見せないように平常心を保ちながらぎこちなくそう言った。

しかしその言葉を見無視して茜は興奮した様子で話しかける。

「昨日の帰りに、ビックリする事があったんだけど」

「へえ、どんな事？」

内心舌打ちをしながら機嫌を損ねないよう相槌を打つ。

興奮状態の茜の口から発せられる言葉は大抵『従兄弟が有名なアノヒトのライブツアーに行った』とか『友達がナンパされた』というどうでもいい自慢話だ（しかも自慢話になり得ていない）。

「あの最近話題になってる芸能人いるじゃん？——といっても朔は疎いから知らないよね。あのね、その人の妹サンが昨日、あたしの家の近くのカフェでお茶飲んでたんだって！ヤバくない？」

朔を小馬鹿にしながら自分の自慢話をノンブレスで一気に言いのけ

る。

朔は慣れたように、けれど溜め息をつきながら

「そうなんだあ」

と返した。

何がヤバいんだかちつとも理解できなかったが。

「それで、本題なんだけど――今日英語当たっちゃうからノート貸してくれない？」

お願い、と顔の前で両手を合わせてすまなそうに頼む。強面の茜とそのポーズは素晴らしく似合わない、と朔は思った。

「うん、いいよ」

バッグから英語のノートを取り出すと、それを茜に手渡す。

「さんきゅー」

茜が最後まで御礼を言い終わらないうちに自分の席に戻っていつてしまった。その後ろ姿を見届けて背もたれに寄りかかる。

朝から疲れを感じながら昨日の屋上の出来事を回想した。

一回思い出すと、彼女の存在が気になってしまい、結局朔はまともに授業を聞くことなく昼休みに入った。

「お昼食べよ」

茜が断りもしないで前の席にどかっと座った。

「あれ？ 祐希はどうしたの？」

「ああ、今日休みだよー。だから朔に借りたんじゃん。祐希がいたら絶対祐希に借りるしい」

皮肉を言いつつシニカルに笑う茜に嫌気が指す。

「――あたし、ちょっと用あるから一人で食べてね」

“一人”という語を僅かに強調しながら笑顔でそう返す朔。茜が一気に不機嫌そうな顔つきになった。

「外せない用？」

「うん。部活の先生に呼ばれちゃってさ」

咄嗟に嘘をつく。茜は暫く朔を舐め回すように見ていたが、溜め息をつく

「じゃあ、あたしは里佳達と食べてるから」
と言ってすごすごと引き下がった。

朔は弁当を持つと、宛てもなく教室を出た。

初めて茜に反抗した気がして嬉しさはあった。

けれどその気持ちの前にやはりあの少女が気になってしまい、無意識的に再びあの屋上へと来ていた。

破れかかった紙も、錆付いた蝶番も昨日のままだ。

朔はゆっくりとドアノブを回し、解放された空間に足を踏み入れた。

再会…後編

期待していたもののまさか本当にいるとは思わなかった。
その人物はあのフェンス越しにどこか遠くを見ていた。

「あの……っ」

朔は思わず声を掛ける。

あの艶のある黒い髪が揺れ、あの鋭い眼差しが朔に向けられた。
朔の脳裏にデジャヴ現象という言葉が一瞬過ぎった。

「……何」

抑揚のない声でそれだけ言う。

「昨日ぶりだよね」

「ああ」

朔の来訪に大して興味を示さなかった少女の目線は再び外の景色に集中した。

朔もおずおずと少女の一メートル程離れた場所まで歩き、フェンスを掴みながら一緒になって街を見下ろした。大分高いみたいで太陽の光を充分に浴びた街並みが窺える。

「こうしてみるとこの街も都会らしいよね」

「そうだね」

朔のぽつりと呟くような声にも少女は相変わらず淡々としていたが、答えてくれた。

朔は少女に近づいたけれどそれを否定しなかったためにその横顔をまじまじと見る。

こうして改めて見ると、息を吸うことを忘れてしまうくらい整って

いて綺麗な顔だった。

こんな顔をしている人が何故自殺をしようとしたのか、朔には不思議でならなかった。

ふとネクタイの色を確認する。学年毎に分かれているそれはえんじ色でこの少女は自分と同じ一年生だという事が分かる。因みに二年生は緑色で三年生が紺色だ。

「同じ一年生なんだね。なんて名前？」

かすが
「春日」

「へ？」

「春日レイ」

春日レイ——朔は口の中で少女の言葉を繰り返す。

「レイ、って呼ぶね。あ、あたしのことは——」

「望月朔」

「っそう！ 呼び捨てで朔でいいからねっ」

朔は自分の名前を覚えてくれていることに嬉しくなって思わず笑顔になる。

屈託のない素直な笑顔を今度はレイがまじまじと見た。

「綺麗」

「え？」

「何でも無い」

それから朔は昨日のことには触れずに当たり障りのない話に花を咲かせた。

レイも短い相槌ではあったが一応ちゃんと聞いてくれているみたいで、それにつれて朔のマシングントークもヒートアップしていた。

再会＊end

再会：後編（後書き）

台詞が多いですね。修行不足です；近々一から見直しでもするかな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3382d/>

自殺志願者の君へ。

2010年10月18日03時51分発行